

自己形成過程に関する研究の概観と今後の課題

— 一個人の主体性の問題 —

水 間 玲 子

The review and future tasks on the process of self-development:
Focusing on the individual's agency.

MIZUMA Reiko

は じ め に

我々は生まれてから様々な経験を蓄積する。それが我々の自己に意味を与える。森（1970）の述懐は印象的である。「ある時期まできたときに、経験というものが私自身の意味である。また、一人一人が自分の経験を持っていて、その経験はほかの人の経験と置き換えることができない。ある一人の人間ということと、ある一つの経験ということとは全く同じことであり、そのある一つの経験というものは、一人の人間というものを定義するもので、それ以外に人間というものは考えられない。それ以外にあるのは、ただ人間の形をした一つの肉体の固まりであって、それはそれだけでは人間といえない。ある一つの『経験』というものが内面的に与えられたときに、それがそこに一人の人間がいるということの事実を定義するのだ。そういうことになってきたわけです」（森, 1970, pp.48-49）。この、一個存在としての人間を感じさせるものとは何かを考えていくときに浮かび上がってくる概念こそが自己である。それゆえ、我々は経験によって自己を形成しているといえるのであり、個人の経験について考えていくことは、自己形成過程を考えていく上で最も有効な視点の一つであるといえよう。

本論文では、自己形成過程に関するこれまでになされた研究の成果をまとめ、その基礎となる経験について考えたときに浮かび上がる問題点を提起し、今後の課題を示していくこととする。

1. 自己の形成過程に関するこれまでの知見

1. 1. 経験と自己

Mead（1934）においては、自己は社会的経験・社会的活動の過程のなかに生じる、他の諸個人に対する個人の関係の結果として個人のなかで発展するものとされている。たとえば、他者が自分自身に対してどのような態度をとり、どのように話しかけ、どのように自分を見なしているのか。これらは相互作用において他者から与えられる自己へのフィードバックであり、自分自身

を知る上で非常に重要なものである。このような他者との関わりの中で、我々は自分に関する豊富な知識を得ていくとされる。直接的にふれあい、相互作用しあう他者のみでなく、書物やテレビなどを通して関わる他者も自己に関する知識をもたらす。様々な他者の存在と、その他者の特徴を知ることによって、たとえば背が高い・低い、賢い・愚か、速い・遅い、美しい・醜いなどの自己をとらえる様々な基準を知るようになるからである。そうして他者を知ることによって、個人は自分の基本的特徴を相対的にもとらえることができるようになる。

このような自己知識について、Neisser (1993) は次の5つの視点からとらえられるとした。生態学的自己、対人的自己、想起的自己、私的自己、概念的自己である。特に前の2つは、経験の中で自己知識を得ていく過程についての理解の枠組みを与えてくれる。

生態学的自己とは、我々がどこにいるのか、何をしているのか、何をしたのかなど、行為の主体としての自己である。たとえば我々は、自分の周囲の壁が後方に動いているということ、自分が前方へと動いていることとして解釈している (cf. Lee, 1980; Lishman & Lee, 1983)。それは我々が自分との関わりの中で環境を知覚し、そこから自己についての直接的な知覚を得ていることを示している。また、我々がある行為をする場合、我々は単に自分の行為とその結果に気づくだけであるが、そのことは自己への気づきにもつながる (cf. Gibson, 1979)。その、行為によって気づかれるところの自己が生態学的自己である。対人的自己とは、他者との関係において直接知覚される自己である。他者とさまざまなやりとりをしていく中で、我々は触覚的・聴覚的・視覚的な様々な情報を得ている。ただし、その時知覚されているのは他者の行動だけではない。我々は他者を知覚すると同時に、他者に働きかけ、また他者の働きかけに反応している自分自身についての知覚も行っている。すなわち、そこで相互交換している自己についても知覚している。このように、自分自身を他者の注意との対象として、あるいは相互作用を他者との共同のもとに生み出す主体として知覚されるところが対人的自己である²¹。

これらはいずれも、行動を起こしているまさにその場において、客観的に存在する物理的環境や他者との関わりを通して直接的に知覚されるものであり、反省的に振り返ることによって知られるものではない。自己の動きや行為を感じると、臨場感のある自己であり、自己存在へのプリミティブな気づきを与えてくれるものである。そこで対象化されているのは自己ではなく、環境であり他者である。だが、それらはいずれも自己との関わりにおいて存在する環境であり他者である。そのため、それらを通じて我々は自己に関する知識を得るのである。その知識が記憶され (=想起的自己)、概念化されて (=概念的自己)、我々はいつしか他者とは違う「自分」として感じるような (=私的自己) 仮説的構成体を意識するようになっている。それが、自己概念 (あるいは概念的自己) とよばれるところである。

自己概念はある程度まとまりをもったゲシュタルトとして感じられるが、それは決して固定的なものではなく、経験と共に変化する。このことは古くからGergenらによって報告されてきたところである。たとえば、Morse & Gergen (1970) においては、傍観者の外見が変わることによって人々の自己概念は容易に変化することが報告されている。また、相手が自分に対して肯定的に接するか否定的に接するかによって、自己概念を変えて相手に反応することがある (Gergen, 1965)。その他にも、好ましい役割を求められた時 (Gergen, 1965)、自分より地位の高い人と話す時 (Gergen & Taylor, 1969)、自分本位の相手とつきあう時 (Gergen & Wishnov, 1965)

など、様々な状況においてそれぞれに応じた自己概念を我々は作り上げるとされている。特定の状況あるいは人間関係の中で追求されると考えられている「状況づけられたアイデンティティ (situated identity)」(Alexander & Knight, 1971) などは、このような、自己が状況に応じて変化するものであるという点を浮き彫りにする概念である。さらに、Burr (1995) によると、我々の諸自己は、我々の内部にでなく、社会的な出会いや関係の所産として、人々との間に存在するもの、あるいは、社会的に構築されたものであり、我々は、単一の統合された固定的自己ではなく、断片化された、互いに必ずしも調和しない多数の潜在的諸自己をもつ、と、我々の自己についての考え方自体が修正される。

これらの議論から明らかにされることの一つに、個人がいかなる状況に身をおいて経験を重ねたのかということが、自己形成に大きく影響するという点をあげることができる。概念的には、実験場面では条件ともよばれるし、社会的構築主義では社会ともよばれる。自己形成を考えていく上では経験が展開される世界といってよいであろう。それに即した形で自己が形成されると考えられるのである。ここで気をつけたいのは、客観的にどれだけ同じような状況下にあっても、個人がそこでいかなる経験をするかということは決して一様ではないということである。それは、個人が独自のやり方によって外的世界をとらえ、そこにおいて経験を重ねているためであると考えられている。

1. 2. 我々の経験の重ね方

同じような事象であっても、人によってそれをどう受け止めるかが違うということは、我々の日常においてもよく観察されることである。まず、これについて考えてみよう。この点については、自己評価²²が大きく影響を与えることが知られている。たとえば、自己評価の低い人は高い人と比べて日々のできごとをより否定的に評価し、自分の気分に対してより大きな衝撃を与えるものとみなす傾向があること (e.g., Campbell, Chew, & Scratchley, 1991; Garton & Pratt, 1995)、ライフストレスによる負の影響が自己評価の低さのためにより大きなものとされたり、希望の喪失感などが生まれやすくなること (e.g., Brown, Andrews, Bifulco, & Veiel, 1990; Brown, Bifulco, & Andrews, 1990; Miller, Kreitman, Ingham, & Sashidharan, 1989) などが明らかにされている。ここから、自己評価が否定的な人は、否定的な事象をより否定的なものとしてとらえているようであるといえる。さらにMcFarlin & Blascovich (1981) では、自己評価によるこの事象に対する意味づけの違いが、直面した事象のみならず、予想される事象に対しても同様にみられることが報告されている。これらの結果は、それらを経験する自己のあり方によって、その経験のもつ意味が異なってくることを示している。このことについて、以下、順を追って述べていくこととする。

まず、いかなる世界に身をおいているのかという点がすでに個人によって異なることを指摘しておくべきであろう。我々が身をおき、経験を重ねている世界は、厳密に言うと、個人特有の私的世界である。これは、我々が他者と共有できない分断された世界に存在しているということを意味するわけではない。たとえば、そこに机がある、誰々がいる、車の音が聞こえる、など、その世界における様々な事象を我々は他者と共有している。それらは我々の経験における重要な事象ともなる。しかしながら、我々はそれらを無秩序に呈示される刺激の羅列としてではなく、そ

これらの要素によって構成される「世界」を経験している。そしてRogers (1951) が「個人はすべて、自分が中心であるところの、絶え間なく変化している経験の世界に存在する (p.483)」と述べるように、その世界の中心は「自己」であると考えられている。以後、ここではその私的世界を「経験の世界」とよぶこととする^{註3}。

そして我々は独自の経験世界に身をおくのみでなく、そこで生じる事象を独自の枠組みでとらえているため (cf. Rogers, 1951), 経験の世界においていかなる経験をするのかというプロセスももちろん、個人によって様々である。我々は、客観的な意味での環境や他者があるがままに受け止めて経験としているわけではなく、あくまでも自らの内的枠組みによってそれらを選択し、選択した事象を経験としているのである。ある事象に直面した際に、そこから何に注目し、何をとらえていくのか。そのような我々の経験に伴う認知過程が個人によって異なることはこれまで明らかにされてきているところであり、外的な環境やそこで起こる事象などをとらえる個人独自の認知的枠組みとしても、既成の「自己」があげられている。そのため、これは「自己を中心とした認知過程」とよぶことができよう。

自己を中心とした認知過程としてまず指摘されるのは、認知の枠組みとしての自己の問題である。Markus (1977) は、独立性-依存性という特性次元に関するスキーマを設定し、それに関する語が自分にあてはまるか否かの判断課題を、独立群 (自分を明確に独立的だと評定し、さらに独立性-依存性の次元が自己記述にとって重要だと評定した者)、依存群 (自分を依存的だと明確に評定し、かつその次元が自己記述のために重要とした者)、スキーマなし群 (自己評定が中性的ではっきりせず、次元の重要性の評定も低い者) の3群によって比較した。その結果、独立的・依存的という各特性を表す形容詞について「自分に当てはまる」と判断した割合は、各特性スキーマをもつ者においてもっとも多く、また、もっとも速く反応していたことが明らかにされた。自己に関するこの認知的枠組みは「セルフ・スキーマ」とよばれる。ここから、我々は我々の思う「自分」すなわち自己概念と合致する情報が呈示された場合、それをより素早く処理していることが分かる。そこでのセルフ・スキーマの信憑性はさほど問題とはならないことも明らかにされている (Mischel, Ebbesen, & Zeiss, 1973)。これらの結果から、我々は自己に合致する情報をもたらす刺激を、知らず知らず、より素早く、より多く処理していることがわかる。そして、ここから、我々は経験を重ねる過程において、その時その時身をおく場で進行していく事象を、自己を中心とした枠組みによって選択していることが予想されるのである。

自己を中心とした認知過程は、経験を記憶する段階においても指摘される。Rogers, Kuiper, & Kirker (1977) は、単語の偶発的記憶に関する実験において、学習時の処理条件における違いを検討した。各処理条件は、形態的処理 (各単語が大文字で書いてあるか否かの判断をさせる)、音韻的処理 (各単語が特定の語と韻を踏むかどうかの判断をさせる)、意味的処理 (各単語が文中の空所に入る語として意味が通じるか否かの判断をさせる)、自己関連づけ処理 (各単語が自分にあてはまるか否かの判断をさせる) の4つであった。その結果、前3条件の中では意味処理条件において最も記憶成績が優れており、さらに自己関連づけ条件では意味処理条件をはるかに上回る再生が得られた。これより、項目を自己に関連づけるという認知操作が記憶を向上させるということが明らかにされた。また、自己関連づけ条件は、他者関連づけ処理 (各単語が他者にあてはまるか否かの判断をさせる) の条件よりも再生率が高く、また、再生された語は他の語よ

りも反応時間が短いこともKuiper & Rogers (1979) によって明らかにされた。ここから、自己に関わる情報は、より選択的に知覚されるのみでなく、より記憶されるようであることがわかる²⁴。知覚され、記憶された情報は、我々の過去経験となる。

さらに、自己を中心とした認知過程は過去経験に対しても適用される。過去経験は、記憶として保持されていく中で、現在の自己に規定される形で変容することがあると指摘されているのである。たとえば青年による子ども時代の想起内容は、子ども時代におけるアタッチメントの安定性とはではなく、現在における適応状態と関係しているという報告がある。Lewis & Feiring (in press: Feiring & Taska, 1996より引用) によると、幼児期に不安定愛着群に分類された青年と、幼児期に安定愛着群に分類された青年との間には、自分自身の幼児期を不幸とか不安定とかみなす程度についての違いはみられなかった。だが、自分自身の幼児期を否定的に想起する青年は、肯定的に想起する青年よりも現在の自分自身を適応していないと評定する傾向がみられた。この結果により、過去が現在の状態をもとにして再構成、再評価されることが示唆されたのである。またRoss (1989) は、妊娠中絶に対する態度など記録に残されている事項を用いて、5年後の自分の態度について尋ねた。その結果、その答えが不正確である場合があり、それは現在の自己概念と同様のものとして過去をとらえることによることが明らかにされた。すなわち、過去に中絶に反対し現在賛成の立場をとる者は、自分は過去においても賛成派だったと答え、過去に中絶に賛成し現在反対している者は、自分は過去においても反対派であったと答える傾向がみられたのである。昔も今も反対派の人が、自分が過去において賛成派だったと答えるような間違いはみられなかった。このことは、現在我々が自己を中心として経験を重ねているのみでなく、過去の経験さえも、現在の自己を中心とした枠組みによって経験し直されていることを示している。

これまで見てきたような経験における自己の規定は、自己の一貫性を保とうとする動機によるものと説明されている。自己概念が変化に対して抵抗を示すという性質を持つものであり、自己概念に合致しない情報は無視されがちである (e.g., Greenwald, 1980; Tesser & Campbell, 1984; Swann & Hill, 1982; Swann, Stein-Seroussi, & Giesler, 1992), それはたとえ否定的な自己概念をもつ場合であっても成立する (e.g., Brown, 1993), という理解を導く実証的研究は多い。このような自己の一貫性を求める動機は、古くはLecky (1945) やRogers (1951) において自己概念の性質の一つとして指摘されてきたところであり、Swann (1983, 1990) においては自己確証動機として検討が重ねられてきたところである。その動機によって、人は、自分はこんな人間であると日頃から思っている自己概念を確証、確認してくれるような社会的現実を求め、それを実際の社会的環境と自分の心の中に創り出すように行動したり解釈したりすると考えられている。そのような動機をもつ主体として、我々は経験世界に身をおいているのである。

ここでの議論をまとめると、以下の通りである。我々は、自己を中心とした経験世界に身をおき、自己を中心としたフレームによって選択された環境や他者との相互作用を重ねている。さらにその経験は固定した不変の記憶となるわけではなく、自己が変わると記憶に残されている過去経験の意味、時には内容も変容する。その際、再構成のフレームを提供するのは、記憶の再構成すなわち過去経験のとらえ直しがなされる時点での自己である。それをフレームとして、過去の経験が現在において再体験されるのである。

2. 問題点の提起

1. 1. であげた自己の変動性を主張する議論では、自己は外的環境との関係によって容易に様相を変えることが報告されてきた。そこで呈示された自己形成過程に関する見解は、ある環境下におかれることによって、あるいはある事象に直面することによって、それに即した形で自己が形成されるというものであった。しかしながら、1. 2. であげた議論をふまえると、我々は、既成の自己概念によって大きく規定される中でのみ、すなわちその枠組みを超えない範囲においてのみ、経験を重ね、それを解釈し、意味づけを与えているという印象が生じる。もしもそうであるならば、自己形成過程について次のような理解が生まれる。たとえば、ごく抽象的な言い方をすれば、一旦自己が肯定的なものとして形成されるとその肯定性をより強めるような経験を重ね、また一旦自己が否定的なものとして形成されるとその否定性をより強めるような経験を重ねていくということである。結果として、最初に形成された肯定性、否定性は永続的に続くことになる。ここからは、何らかの恒常性を備えたものとしての自己がクローズアップされ、それを維持・強化していく過程としての自己形成過程が理解されてくる。

1. 1. における自己変動性の議論と1. 2. における自己一貫性の議論とは見解を異にするものではあるが、いずれが正しいのかというような二者択一的なものではないと思われる。自己変動性の議論は、個人が身をおく条件や接する他者を中心とした文脈で論じられていた。それに対して、自己一貫性の議論は、我々が経験を重ねる際にはたらく認知過程に焦点が当てられる中で示されたものであった。双方を考慮していく重要性は指摘されるものの (cf. Brown, 1993)、文脈と視点を異にした点からのアプローチであるという位置づけ方をすることができる。そして、自己を形成する経験がいかに重ねられているのかということを具体的に考えてみると、これまでの議論ではいずれにしても不十分な点が指摘されてくる。そこには経験を重ねる主体的な個人の存在が無視されていたということである。これまで検討されてきた経験とは、意志や信念なども含めた個人の意識の問題を考慮しないでも論じていける範囲のものにとどまっていたと考えられる。だが、そのような個人の意識のあり方も、経験において考慮すべき重要なものである。

我々は経験世界に身をおいているが、それは、我々自身が経験世界を構成する重要な要素としてその構造の一部を担っていることを意味する。そして、我々の経験は、知覚も含めた我々の行動によって重ねられる。そのとき、個人の主体的な意図にもとづいて行為がなされることもある。それも重要な経験となる。そのような個人の意志や意図といった主体の問題は、これまでほとんど検討されていないように思われるのである。たとえば、1. 1. に述べた自己変動性の議論においては、経験は研究者によって与えられるものであり、個人が経験を選択する余地はなかった。1. 2. に述べた自己一貫性の議論においては、経験は個人独自の枠組みによってではあるが、自動的に重ねられていくものであった。しかしながら、我々は実際には、何らかの意図をもって、あるいは自覚的な判断をもって行動しているところがある。

3. 我々の行動によって重ねられる経験

3. 1. 行動における既成の自己の規定

我々は経験を知覚すると同時に、そこに身をおき行動し、経験を重ねる主体として存在し、経験世界の構成に主体的に参加している。経験となる我々の行動についても自己概念の問題は重視される。Combs & Snygg (1959) によると、我々の行動は自分に対する知覚と周囲の環境の知覚とによって決定づけられる。一見辻褃の合わないように思える行動でも、本人の自己概念を照合すると十分に筋の通った行動であることもある。Combs & Snyggは次のような例をあげる。「ある人が、自分はナポレオンであると信じるならば、その人はナポレオンのように、さもなければ少なくともナポレオンについてのその人の概念のように、行動するであろう (Combs & Snygg, 1959; 手塚訳, p.196)。」その際、ナポレオンであるという自己概念が客観的に妥当であるか否かは本人にとっては重要ではない。ナポレオンであるという自己概念自体が重要なものであり、それは個人の行動をも決定づける重要性をもつのである。そしてその自己概念に支えられて展開された行動は、自己を形成する重要な経験となる。

実証的には、自己形成にとって重要な意味を持つ他者との相互作用も、その他者の選択において自己概念による規定を受けていることが報告されている。Swann, Stein-Seroussi, & Giesler (1992) は、肯定的な自己概念をもつ人と否定的な自己概念をもつ人を対象に、肯定的評価を与える者と否定的評価を与える者との2タイプのパートナーから1人を選ばせた。すると、否定的な自己概念をもつ者は、自分を肯定的に見てくれる他者ではなく、むしろ自分を否定的に見ている他者をパートナーとして選ぶ傾向があった。なぜそのパートナーを選んだのかについての理由は、たとえ否定的な見方であれ、自分と同じ見方をしていたからというものであった。Swann & Hill (1982) では、自分のことを支配的であると思っている者は、従順だというフィードバックを他者から受けた場合、自分の「支配的である」という自己概念を認めてくれる他者を求めることが報告されている。他者は自己概念にとって非常に重要な相互作用をする相手であるが、その他者を選択するという行動自体が、自己概念に規定されてなされていることをこの研究は示している。

では我々の行動も、やはり、既成の自己概念によって大きく規定される中で、すなわちその枠組みを超えない範囲において展開される²⁵と考えられるのであろうか。我々が主体的に経験を重ねていることを考えると、これと全く逆の方向で行動が展開される可能性も十分に想定されてくる。第一に、我々は自己を変えるような環境や出来事を自分にとって意味あるものとして選び取ることがあるからである。それを我々は「転機」とよび、それを境に経験世界自体ががらりと変わったりもする。第二に、我々は自らの意志で、自己の範囲を超えるような行動を意図することもあるからである。

3. 2. 個人にとって意味ある状況とは

1. 1. の議論においては、外的変数が操作されることによって経験が研究者によって固定されていた。それらを個人の主体的側面との関連で考えていくと、そもそもそれらの外的変数が意味あるものと判断されているのか否かという点からの再考が促されてくる。

参考になる研究として尾崎（1998）をあげることができる。そこでは、「人生の意味」獲得と適応との関係についての見解が整合していないことが問題とされ、その課題を重要な課題とみなしているか否かが吟味され、「人生の意味」獲得の有無と適応との関連が再考された。その結果、「人生の意味」獲得を重要な課題としている者においては「人生の意味」獲得と適応との有意な関連が見られたが、そうでない者においては両者の関連は弱いことが明らかにされた。この結果もふまえて尾崎（1999）は、将来展望に関する研究に関して、そもそもそこでトピックとされる将来という次元がどの程度個人にとって重要なものであるのかを考慮しなければならないことを指摘する。これらの研究は、検討しようとする変数が個人の経験世界において重要なものとして位置づいていなければ、その変数に関する議論があまり意味をなさないことを示唆している。

研究者がある程度文脈を制限し、個人にとって意味があると思われる経験世界の構成要素を社会的要因として設定することによって、より深い見解を得ることができることを示した研究もある。水間（1998c）では、将来の見通しと自己評価および未来イメージとの関係を検討する中で、それら社会的要因を考慮する重要性が示唆されている。そこでは、被験者を「将来の見通し」の有無によって「見通しあり群」、「見通しなし群」の2つのタイプに分類し、さらに、前者については「見通しの内容」（自由記述）とフェイスシートにある在籍学部・学科との関係からさらに分類し、将来の見通しが在籍する学部・学科上の延長上にある場合は「環境あり群」、ない場合は「環境なし群」とした。最終的に「見通しあり・環境なし群」、「見通しあり・環境あり群」、「見通しなし群」の3群が設定され、それらを独立変数とし、自己評価、将来のイメージを従属変数とした一要因分散分析がなされた。その結果、自己評価において群による有意差がみられ、多重比較の結果、「見通しあり・環境あり群」が他の2群よりも有意に高かった。また、未来イメージについても、「愉快的」「満たされた」「希望に満ちた」など15項目で有意差がみられた。そこから、個人の身を置く社会的要因（学部・学科）が影響して、個人の経験世界を形成していることが示唆された。これらはいずれも客観的な変数であるが、個人が将来ということを考える際には、経験世界における重要な要素として位置づいていることが示唆されている。

我々が外的に与えられている状況を自己となんらかのやり方で結合させ、自己にとって意味ある変数とみなした場合、それは個人にとって重要な経験としての意味をもつようになる。1. 1. であげたような外的変数についても、主体的な判断過程を有する個人にとって意味あるものとされるものである場合は、第三者によって与えられる経験であっても、それは個人の自己を永続的に変えるほどの経験になることがある可能性を十分考えていくことができるのである。

いかなる変数が個人の経験世界において重要なものとされているのかを探るものとしては、McGuire（1984）の研究が興味深い。McGuire（1984）は、自己に関する自由な記述を「あなたについて話してください（Tell us about yourself）」という質問によって求めた。そこで表れた自己は、「自発的に表出される自己概念（spontaneous self-concept）」と呼ばれ、個人にとって重要な自己であると考えられる。その内容と、回答者のさまざまな属性（性別、家族内の男女構成、身長、体重、人種、髪の色など）との関連を検討したところ、個人が身をおく環境と「自発的に表出される自己概念」との関連を示唆する結果が明らかにされた。すなわち、家族に女性が多い男児は自分の性別を、身長の高い、あるいは低い児童は、平均的な身長の児童に比べて自分の身長のことを、というように、自己を描写する際に顕在的な自己の特性に言及することが多

いことが報告されたのである。「自発的に表出される自己概念」では特に個人にとって重要な事柄が記述されやすいことから (cf. 溝上, 1999), この結果は、自らの特徴を顕在化するような他者や環境というものが、個人の経験世界において、非常に大きな意味をもってとらえられているようであることを示唆している。このように、我々が意味あるものとみなした事象はすべて、我々の自己を形成する重要な経験に関わるものとなるのである。

3. 3. 我々の行動における意図の問題

我々の経験世界では、個人を中心として、そこに関わるあらゆる事象が個人の経験にとって重要なものとなりうる。たとえば、イデオロギー、思想、偏見なども、顕在的ではないながらも、我々の経験を大きく規定する力となっていることが多い (cf. 水間, 1998a)。そのため、それらは時には意識もされないようなレベルで、ごく自然に我々の自己形成過程に関与してくる。その力の作用が変化することによって、我々はアイデンティティさえ失うことがある (cf. 橋本, 2001)。

だが我々が主体的に行動をしているということを考える際、経験世界にはたらく力として、最も重視すべきものの一つはやはり、個人の意図であろう。たとえば、個人が何か今とはちがう自己イメージを求める時、あるいは周囲の状況を読みとって自分を押し殺す時、個人は今の自己概念に一致しない行動をとることがある。あるいは自己呈示や印象操作などにおいて典型的にみられるように、我々は今の自己概念に関係なく、「こうしよう」という意図をもって行動を重ねることがある。個人が何らかの意図をもって展開した行為も、自己を形成する経験となる。Goffman (1959) のように、意図的になされる社会的な行動自体がその人の自己であるとする考え方もある。そしてそれによって他者からのフィードバックが変わったり (Schlenker, Dlugolecki, & Doherty, 1994), それらの行動を重要な経験として記憶することによって自己全体の状態が大きく変わることもある (e.g., Rhodewalt & Agustsdottir, 1986; Schlenker, & Trudeau, 1990; Tice, 1992)。Fazio, Effrein, & Falender (1981) は、実験者の質問項目の選択によって内向的、あるいは外向的に振る舞うように誘導された被験者は、その後、それぞれの行動に合致した方向に自己評定し、また、実際の行動 (発話時間、対人距離) にも同様な影響が認められた。

このように、個人が主体的に何を見ようとしたのか、何をしようとしたのか、という観点から経験をとらえていくことによって、自己形成過程において新たな理解が得られる可能性が示唆される。ところが、個人の意図とも深く関わるとされる理想自己や個人的目標に関する研究においても、この問題はほとんど考慮されていない。理想自己や個人的目標などは個人の望む自己の方向性を示すものでもあり (cf. 水間, 1998a, 1998b), 個人の意図的な行動から自己形成を考えていく際には非常に興味深いトピックとなると思われるため、もっと考慮されてもよい問題である。また、そのような行為を支える我々の意図は、我々が経験世界における場の力を様々に読みとって成立していると考えられる。我々がいかに行動するのかは場の力によるとさえ Lewin (1951) はいう。その意味では、個人の意図というのは、個人が身をおいている経験世界における場の構造を理解していく可能性をも示唆するところである。

お わ り に

自己は経験によって形成される。言葉は単純であるが、そのプロセスは非常に複雑なものである。経験とは自己と経験世界との相互作用そのものであり、自己は経験を受ける形で経験世界との相互作用を重ねているからである。つまり、自己は経験と共に動き、経験は決して固定しない、そして経験は自己と連動した形で重ねられる、というように、どの側面においても相互作用が仮定されてくるのである。自己形成過程について考えていくには、結局、経験世界と自己との相互作用である経験を、個人の経験世界に沿って考えていく視点が必要になる。

本研究では、その一助として、経験世界において行動を展開する個人の主体性に注目した。いかなる環境を意味あるものとみなすか、そして、いかなる意図をもって行為を展開するのか。個人の自己形成過程においてはそのような主体性に支えられる行動も重要な経験となる。特に、目標や理想といった、個人の信念にも関わってくるような事象に関する意図は、個人の自己形成を考えていく上でも看過できない問題である。この点についての今後の議論が期待される。

なお、本論文では言及できなかった部分であるが、自己形成過程を考えていく上で経験と同時に考慮しなければならないのはアイデンティティの問題であろうと思われる。様々な自己が経験とともに形成されながらも、それらをすべて自分として感じられる感覚。それは、それらを自分自身だと感じることでできるアイデンティティの感覚による(cf. Burr, 1995; 橋本, 2000)。個人の主体性の問題を論じることができるのも、このアイデンティティの感覚があるためであろう。経験と共に変化するものとして自己をとらえながらも、一方で個人のアイデンティティについての検討も進められていくことによって、自己形成過程を一つのまとまりのあるプロセスとして呈示することができるのではないかと考える。

謝 辞

本論文の執筆にあたり、京都大学大学院教育学研究科教授子安増生先生に丁寧なご指導を賜りました。厚く感謝申し上げます。

注

1. 他者との相互作用がなされる場合には、会話はもちろん、表情や声の調子など様々なメッセージのやりとりの中で相互の内的状態をも交換しているのであるが、対人的自己とはそのような内的状態ではなく、相互交換しているというその人を指す。Cooley (1902) や Mead (1934) は他者との相互交換の中でやりとりされる表情や声の調子などのメッセージを重視し、そこから自己の内容の獲得について論じているが、ここで問題となるのはその内容ではなく主体としての自己の知覚であるため、それらはここでは想起的自己の範疇に位置づくようである。
2. これは古くから自尊心 (self-esteem) の問題として重視されてきたものであり、実証においては自己評価として検討されてきたものである (水間, 印刷中)。
3. この経験の世界は、「心理的場」(Koffka, 1935), 「知覚の場」(Combs & Snygg, 1959), 「現象の場」・「経験の場」(Rogers, 1951), などと呼ばれるが、両者の言葉のもつ意味合いの違いとしては、時間性があげられるようである。たとえば、Combs & Snyggによると、知覚の場とは、「行為のその瞬間に、その人によって経験されるがままの、その人自身を含めた全宇宙 (Combs & Snygg, 1959; 手塚訳, p.29)」と定義し、Rogersは「経験の場」を「有機体によ

- て経験されるものすべて—それらが意識的に知覚されようとされまいと—を包含する (Rogers, 1951; p.483)」と述べる。すなわち、個人は経験の世界に身をおき、そこで経験を重ねている。その経験世界での個々の瞬間にさまざまな力動をもって構成された世界のあり方が「場」とよばれるようである。
4. ただし、Greenwald & Banaji (1989) は、その際の記憶の促進効果は自己が熟知された評価対象であることによるのであり、その条件を満たすものであれば自己でなくともよいのではないかと述べており、自己関連づけによる記憶促進効果に対して疑問を提出している。Higgins & Bargh (1987) によっても記憶において自己という促進効果は別に独特のものではないとされた。それでも、自己に関する情報が記憶を促進するということを否定することにはならず、自己に関する情報は記憶されやすいということは支持することができる。
 5. ただし、自己評価のような抽象的なレベルで自己をとらえた場合には、それと行動との関連について矛盾した結果も提出されている (e.g., Pelham, 1993; Prout & Prout, 1996)。ただ、これは、自己評価の高さが個人において一体いかなる自己を示しているのか、いかなる意味をもつのかを具体的なレベルで理解されていないことによると考えることができる。すなわち、先のような自己から経験への予測は、「自分は〇〇である」というような具体的な内容を把握した上でなされなければならないということである。

引用文献

- Alexander, C. N. & Knight, G. (1971). Situated identities and social psychological experimentation. *Sociometry*, 34, 65-82.
- Brown, G. W., Andrews, B., Bifulco, A., & Veiel, H. (1990). Self-esteem and depression: 1. Measurement issues and prediction of onset. *Social Psychiatry and Psychiatric Epidemiology*, 25, 200-209.
- Brown, G. W., Bifulco, A., & Andrews, B. (1990). Self-esteem and depression: 3. Aetiological issues. *Social Psychiatry and Psychiatric Epidemiology*, 25, 235-243.
- Brown, J. D. 1993 Motivational conflict and the self: The double-bind of low self-esteem. In R. F. Baumeister (Ed.), *Self-esteem: The puzzle of low self-regard*, (pp. 117-130). New York: Plenum.
- Burr, V. (1995). An introduction to social construction. London: Routledge. (田中一彦訳. 1997. 社会的構築主義への招待—一言説分析とは何か—. 川島書店.)
- Campbell, J. D., Chew, B., & Scratchley, L. S. (1991). Cognitive and emotional reactions to daily events: The effects of self-esteem and self-complexity. *Journal of Personality*, 59, 473-505.
- Combs. W. & Snygg, D. (1959). *Individual behavior: A perceptual approach to behavior*. New York: Harper & Row. (友田不二男編, 手塚郁恵訳. 1970. 人間の行動—行動への知覚的なアプローチ— (上・下巻). 岩崎学術出版社.)
- Cooley, C. H. (1902). *Human nature and the social order*. New York: Schocken Books.
- Fazio, R. H., Effrein, E. A., & Falender, V. J. (1981). Self-perceptions following social interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 41, 232-242.
- Feiring, C. & Taska, L. S. (1996). Family self-concept: Ideas on its meaning. In B. A. Bracken (Ed.), *Handbook of self-concept*, (pp.317-373). New York: John Wiley.
- Gergen, K. J. (1965). The effects of interaction goals and personalistic feedback on presentation of self. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1, 413-425.
- Gergen, K. J. & Taylor, M. G. (1969). Social expectancy and self-presentation in a status hierarchy. *Journal of Experimental Social Psychology*, 5, 79-92.
- Gergen, K. J. & Wisniov, B. (1965). Others' self-evaluations and interaction anticipation as determinants of self presentation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 2, 348-358.
- Garton, A. F., & Pratt, C. (1995). Stress and self-concept in 10- to 15-year-old school

- students. *Journal of Adolescence*, 18, 625-640.
- Gibson, J. J. (1979). *The ecological approach to visual perception*. Boston: Houghton Mifflin.
- Goffman, E. (1959). *The presentation of self in everyday life*. Doubleday & Company. (石黒毅訳. 1974. 行為と演技—日常生活における自己呈示—. 誠信書房.)
- Greenwald, A. G. (1980). The totalitarian ego: Fabrication and revision of personal history. *American Psychologist*, 35, 603-618.
- Greenwald, A. G. & Banaji, M. R. (1989). The self as a memory system: Powerful, but ordinary. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 41-54.
- 橋本広信. (2000). 青年期から成人期へ. 西平直喜・吉川成司編著. 自分さがしの青年心理学, (pp.152-160). 北大路書房.
- 橋本広信. (2001). エリクソンによるエトス概念から見る青年と社会のダイナミズムについて. 日本教育心理学会第43回総会発表配布資料.
- Higgins, E. T. & Bargh, J. A. (1987). Social cognition and social perception. *Annual Review of Psychology*, 38, 369-425.
- Koffka, K. (1935). *Principles of gestalt psychology*. London: Routledge & Kegan Paul. (鈴木正彌監訳. 1988. ゲシュタルト心理学の原理. 福村出版.)
- Kuiper, N. A. & Rogers, T. B. (1979). Encoding personal information: Self-other differences. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 499-514.
- Lecky, P. (1945). *Self-consistency: A theory of personality*. New York: Island. (友田不二男訳. 1955. 自己統一の心理学. 岩波書店.)
- Lee, D. N. (1980). The optic flow field: The foundation of vision. *Philosophical Transactions of the Royal Society of London*, B290, 169-179.
- Lewin, K. (1951). *Field theory in social science: Selected theoretical papers*, edited by D. Cartwright. New York: Harper & Brothers. (猪股左登留訳, 1956. 社会科学における場の理論. 誠信書房)
- Lewis, M. & Feiring, C. (in press). Developmental outcomes as history. *Journal of Developmental Psychopathology*. (Feiring & Taska, 1996より引用.)
- Lishman, J. R., & Lee, D. N. (1973). The autonomy of visual kinaesthesia. *Perception*, 2, 287-294.
- Markus, H. (1977). Self-schemata and processing information about the self. *Journal of Personality and Social Psychology*, 35, 63-78.
- McFarlin, D. B. & Blascovich, J. (1981). Effects of self-esteem and performance feedback on future affective preferences and cognitive expectations. *Journal of Personality and Social Psychology*, 40, 521-531.
- McGuire, W. J. (1984). Search for the self: Going beyond self-esteem and the Reactive Self. In R. A. Zucker, J. Aronoff, & A. I. Rabin (Eds.), *Personality and the prediction of behavior*, pp.73-120. Orland: Academic Press.
- Mead, G. H. (1934). *Mind, self, and society: From the standpoint of a social behaviorist*. Chicago: The University of Chicago Press. (稲葉三千男・滝沢正樹・中野収訳. 1973. 精神・自我・社会. 青木書店.)
- Miller, P. McC., Kreitman, N. B., Ingham, J. G., & Sashidharan, S. P. (1989). Self-esteem, life stress and psychiatric disorder. *Journal of Affective Disorders*, 17, 65-75.
- Mischel, W., Ebbesen, E. B., & Zeiss, A. R. (1973). Selective attention to the self: Situational and dispositional determinants. *Journal of Personality and Social Psychology*, 27, 129-142.
- 水間玲子. (1998a). 自己研究における「価値」—その位置づけと検討意義について—. 京都大学教育学部紀要, 44, 192-204.
- 水間玲子. (1998b). 理想自己と自己評価及び自己形成意識の関連について. 教育心理学研究, 46, 131-141.

- 水間玲子. (1998c). 社会的要因を取り入れた青年心理学研究. 日本青年心理学会第6回大会発表論文集, 26-27.
- 水間玲子. (印刷中). 評価を支える要因の検討—意識構造の違いによる比較を通して—. 梶田叡一編. 自己意識心理研究の現在. ナカニシヤ出版.
- 溝上慎一. (1999). 自己の基礎理論—実証的心理学のパラダイム—. 金子書房.
- Morse, S. J., & Gergen, K. J. (1970). Social comparison, self-consistency and presentation of self. *Journal of Personality and Social Psychology*, 16, 148-159.
- 森 有正 (1970). 生きることと考えること. 講談社現代新書.
- Neisser, U. (1993). The self perceived. In U. Neisser (Ed.), *The perceived self: Ecological and interpersonal sources of self-knowledge*, (pp.3-21). New York: Cambridge University Press.
- 尾崎仁美. (1998). 人生の意味・目的の獲得と適応との関係—個性記述的観点の導入—. 日本教育心理学会第40回大会発表論文集, 199.
- 尾崎仁美. (1999). 青年の将来展望に関する一考察—将来次元の重要性を考慮する意義—. 大阪大学教育学年報, 4, 87-100.
- Prout, N. T. & Prout, S. M. (1996). Global self-concept and its relationship to stressful life conditions. In B. A. Bracken (Ed.), *Handbook of self-concept: Developmental, social, and clinical considerations*, (pp.259-286). New York: John Wiley & Sons.
- Rhodewalt, F. & Agustsdottir, S. (1986). Effects on self-presentation on the phenomenal self. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 47-55.
- Rogers, C. R. (1951). *Client-centered therapy: Its current practice, implications and theory*. Boston: Houghton Mifflin.
- Rogers, T. B., Kuiper, N. A., & Kirker, W. S. (1977). Self-Reference and the Encoding of Personal Information. *Journal of Personality and Social Psychology*, 35, 677-688.
- Ross, M. (1989). Relation of implicit theories to the construction of *personal* histories. *Psychological Review*, 96, 341-357.
- Schlenker, B. R., Dlugolecki, D. W., & Doherty, K. (1994). The impact of self-presentations on self-appraisals and behavior: The power of public commitment. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 20, 20-33.
- Schlenker, B. R. & Trudeau, J. V. (1990). Impacts of self-presentations on private self-beliefs: Effects of prior self-beliefs and misattribution. *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, 22-32.
- Swann, W. B., Jr. (1983). Self-verification: Bringing social reality into harmony with the self. In J. Suls & A. G. Greenwald (Eds.), *Psychological perspectives on the self*, vol.2, (pp.33-66). Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- Swann, W. B., Jr. (1990). To be adored or to be known?: The interplay of self-enhancement and self-verification. In E. T. Higgins & R. M. Sorrentino (Ed.), *Handbook of motivation and cognition*, vol.2, (pp.408-448). New York: Guilford.
- Swann, W. B. & Hill, C. A. (1982). When our identities are mistaken: Reaffirming self-conceptions through social interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 43, 59-66.
- Swann, W. B., Jr., Stein-Seroussi, A., & Giesler, R. B. (1992). Why people self-verify. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62, 392-401.
- Tesser, A. & Campbell, J. (1984). Self-definition and self-evaluation maintenance. In J. Suls & A. Greenwald (Eds.), *Social psychological perspectives on the self*, vol. 2, (pp.1-32), Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Tice, D. M. (1992). Self-concept change and self-presentation: The looking glass self is also a magnifying glass. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63, 435-451.